



TITLE:

編集後記 (泌尿器科紀要 第49巻第
12号)

AUTHOR(S):

CITATION:

編集後記 (泌尿器科紀要 第49巻第12号). 泌尿器科紀要 2003, 49(12): 780-780

ISSUE DATE:

2003-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/115086>

RIGHT:

4. 論文の訂正：査読審査の結果、原稿の訂正を求められた場合は、40日以内に、訂正された原稿に訂正点を明示した手紙をつけて、前記泌尿器科紀要刊行会宛て送付すること、なお、Editor の責任において一部字句の訂正をすることがある。
5. 校正：校正は著者による責任校正とする。著者複数の場合は校正責任者を投稿時指定する。
6. 掲載：論文の掲載は採用順を原則とする。迅速掲載を希望するときは投稿時にその旨申し出ること。
 - (1) 掲載料は1 頁につき和文は5,500円、英文は6,500円、超過頁は1 頁につき7,000円、写真の製版代、凸版、トレース代、別冊、送料などは別に実費を申し受ける。
 - (2) 迅速掲載には迅速掲載料を要する。5 頁以内は30,000円、6 頁以上は1 頁毎に10,000円を加算した額を申し受ける。
 - (3) 薬剤の効果、測定試薬の成績、治療機器の使用などに関する治験論文および学会抄録については、掲載料を別途に申し受ける。
7. 別冊：実費負担とし、著者校正時に部数を指定する。

Information for Authors Submitting Papers in English

1. Manuscripts, tables and figures must be submitted in three copies. Manuscripts should be typed double-spaced with wide margins on 8.5 by 11 inch paper. The text of all regular manuscripts should not exceed 12 typewritten pages, and that of a case report 6 pages. The abstract should not exceed 250 words and should contain no abbreviations.
2. The first page should contain the title, full names and affiliations of the authors, key words (no more than 5 words), and a running title consisting of the first author and two words.
e.g.: Yamada, et al.: Prostatic cancer · PSAP
3. The list of references should include only those publications which are cited in the text. References should not exceed 30 readily available citations. Reference should be in the form of superscript numerals and should not be arranged alphabetically.
4. The title, the names and affiliations of the authors, the director's name, and an abstract should be provided in Japanese.
5. For further details, refer to a recent journal.

編 集 後 記

今年ももう年の瀬である。時の経つのは早いもので、私が現職についてから5年が経過した。5年くぎりで目標を持つことに決めてきたが、振り返ってみると初期の目的が充分達成できたとは言いにくい。

ホームページにも書いているが、教室の大きな目標は「泌尿器科プロフェッショナルの育成」であり、私自身も「泌尿器科のトッププロ」を目指している。この5年間はそれを実現するためのインフラ整備をしてきたつもりだが、まだまだ道のりは長い。ただ、情報公開という面においてはかなりの前進があったように思う。プロとして公正な評価を受けるためには情報公開が不可欠である。ホームページを充実させ、泌尿器科の治療成績もアンニュアルレポートとして公開しているし、アウトカム研究も重点課題として推進してきた。ただ、まだ若い教室だけに、真にプロと呼べるだけの診断能力を持ち、高度な治療手技を実践出来ているかと問われると心苦しい。しかし、それを追求しようとする姿勢だけは維持し続けたい。

情けない話だが、数カ月前より肩関節周囲炎（いわゆる五十肩）で苦しんでいる。体は確実に老化しているようだが、プロフェッショナルを追求する若々しい精神までは老化しないようにしたいものである。

(小川 修)